

館林キリスト教会 デボーションノート（2026年）

2月1日 今日に通読箇所 ヨブ記 30章1～15

「立場の逆転」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOB301.mp3>

[1～8節]にはその当時の、家も持たずに放浪する、もっとも貧しく気の毒な人々が出ている。しかしその人々さえ、ヨブがいま神の祝福を失って貧しくなると、今度は大喜びでヨブをあざけり馬鹿にする。だが人の運命の浮き沈みもまた神のみ手のうちにある。くやしかりょうがヨブよ。信仰をもって忍耐しなさい。「人の歩みは主によって定められる。主はその行く道を喜ばれる」というみことばもあるではないか。

2月2日 今日に通読箇所 ヨブ記 30章16～31

「応えられぬ祈り」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOB302.mp3>

[20節]「わたしがあなたにむかって呼ばわっても、あなたは応えられない」これもまたクリスチャンが時々経験する嘆きである。子供が母にむかって、毒になる食べ物、危ない玩具などを求めても、母はその求めには応えてくれない。実はその応えないことが、母の愛と知恵の応えなのだ。今ヨブは試練の時だから、試練の時期が済むまで、神様はヨブの祈りを無視されるように見えるが、今こそ、もっともヨブの信仰と忍耐が必要な時だ。

2月3日 今日に通読箇所 ヨブ記 31章1～12

「目との契約」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOB311.mp3>

キリストは山上の説教で「目は体の明りである。だから、あなたの目が澄んでいれば、全身も明るいだらう。しかし、あなたの目が悪ければ全身も暗いだらう」と教えられた。いまヨブは自分の目と契約を結んだという。多分「わたしの目よ。お前は見るのが仕事だ。わたしはお前を守り、大切にすることを約束する。そのかわり、目がわたしの罪のきっかけになどならないよう、はっきり約束契約してくれ」というようなものであろう。

2月4日 今日に通読箇所 ヨブ記 31章13～23

「しもべ、はしため」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOB312.mp3>

むかしから「主人は無理なものと思え」ということわざがある。主人、社長、金持ちその他の有力者は、つい知らず知らずのうちに、目下の者、無力な者に

対して無理をし、相手を泣き寝入りさせることがある。相手は口答えも苦情も言いにくくて「めんどうだから、だまって主人の言うとおりにしておけ」ということになりやすい。13章14節をみると、ヨブは以前主人だった頃、その点にもずいぶん注意していたようでありつぱだと思ふ。

2月5日 今日通読箇所 ヨブ記 31章24～40

「良い記憶」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOB313.mp3>

ヨブは苛酷な試みがつづき、心身ともに弱りはたたいま、死を思い、またあらためて自分の生涯をふりかえるのも自然である。ヨブには積極的に罪をおかし、神のみ心をいため、また人に迷惑をかけた記憶がないらしい。それなのにこんなみじめな状態で死ぬのは不本意ながら、しかし苦しみや死のなかでも、これらの「良い記憶」は、ヨブの心の満足であり、慰めであったにちがいない。わたしたちも同じように、おのれの生涯を、つねに喜びと確信をもってかえりみる者でありたい。

2月6日 今日通読箇所 ヨブ記 32章1～14

「正義と罪」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOB321.mp3>

若いエリフは、いままで遠慮していたが、ヨブと三人の議論が平行線でちがいがあかないので、たまりかねて発言することになった。ヨブは人間の中では比較的正しい者だという確信をくずさない。それなのに受けている苦しきは特別なものだから、これは罪のむくいではなく必ず別の意味があると言う。三人は、ヨブは罪人の分際で傲慢にも神にむかって自分の義を主張すると言う。とても話は噛み合わない。ではここでエリフはなんと言うか。

2月7日 今日通読箇所 ヨブ記 33章1～18

「神は語る」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOB331.mp3>

13節に「神の語りかけ」のことが言われている。神は聖書により、キリストにより、教会により、牧師により、また多くのクリスチャンによって、つねに人に語りかけておられる。時には夢、時にはできごとをとおしてさえ、み心を人につたえようとされる。そのみ心はただひとつ、キリストによってすべての人が救われることだ。この愛にみちた神のことばをむなしく聞き流して、そのために滅びることがないようにしよう。

2月8日 今日通読箇所 ヨブ記 33章19～28

「病苦」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOB332.mp3>

ここに書いてあるように、病気は本当に苦しく、不安で恐ろしいものだ。しかし同時に、人が病気によって謙遜真実となり、反省と祈りの機会をえて救いにみちびかれることが多いのも事実だ。だから時には「病気は灰色の天使だ」などとも言われるのである。また神さまは祈りにこたえ、病気をいやして下さることが多い。いずれにせよ神さまが摂理のうちに、病気さえも祝福に変えて下さるのはすばらしい。

2月9日 今日の通読箇所 ヨブ記 34章1～15

「正しい選択」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOB341.mp3>

「正しいこと」と「悪いこと」とはわかりきっているようだが、微妙なケースになるとわからなくなり、案外迷ったり、議論になったりする。その場合まず第一に必要なのは[4節]にあるように、必ず正しいことを選び実行する決意だ。それから祈りつつ、考え、聖書を読み、あるいは話し合っただけで、きっと「われわれの間の良いことの何であるか」は明らかになるだろう。「猶予、孤疑は至誠の足らざるなり」と西郷隆盛も言っている。

2月10日 今日の通読箇所 ヨブ記 34章16～30

「政府の役目」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOB342.mp3>

悪人が自由にはびこり社会秩序が乱れれば、人間が生活できないだけでなく、伝道もおこなわれず人も救われない。それゆえ神は政府を立て、社会秩序を守らせたもう。もとよりそれは摂理であって、政府自体はそんなことは二の次で権力闘争にふけっているから、ずいぶん神の目的に外れた悪政府も出てくるが、しかし政府自体が社会秩序を破壊するようなことになれば、それは長くはつづかず、必ず神の摂理のうちに、別の政権と入れ替わる。[30節]はその真理をしめしている。

2月11日 今日の通読箇所 ヨブ記 35章1～16

「十分な議論」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOB351.mp3>

我々のように短気で結論を急ぐ人間がヨブ記などを読むと、繰り返しが多く、くどくて長たらしいのは驚きだ。昔の田舎会議などでは、村中の人々が楽しみに集って、飲み食いしながら幾日もしゃべっていて、なかなか本題に入らない。しかし実はその間に、たくさんの事例と、意見というよりも、それぞれの人間の気持ちが暗示されるから、表決などなくても、リーダーが民意を知ってそれに合う政治をするにはこれが一番なのだそう。不合理のようで案外合理的なのが面白い。

2月12日 今日の通読箇所 ヨブ記 36章1～14

「神の怒りの貯金」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOB361.mp3>

「心に神を信じない者は怒りをたくわえる」とあるが、神を知らぬ人間は毎日せつせと罪を犯し、悔い改めることもせず、罪の責任、罪に対する神の怒りを蓄積して、最後にその支払い、すなわち神の審判を受けるのだ。働かない日、もうからない日はあっても、罪を犯さない日はない。我々はそれを知って、日々謙遜、真実に悔い改め、それが罪を追い越すようであればならない。

2月13日 今日通読箇所 ヨブ記 36章15～26

「逆境の祝福」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOB362.mp3>

人は誰でも生活が順調、幸福であることを望む。しかし季節に秋も冬もあるように、そしてそれもまた必要、大切であるように、時に人は逆境を経験する。「神は苦しむ者をその苦しみによって救い、彼らの耳を逆境によって開かれる」とあるのは、逆境もまた神の摂理、祝福であるという事実を示すのである。おそらくクリスチャンは誰も、試みによる信仰と人格の訓練、また成長を経験して、このみ言葉が真理であることを理解している。

2月14日 今日通読箇所 ヨブ記 37章1～20

「神のみわざ」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOB371.mp3>

「ヨブよ。立って神のくすしきみわざを考えよ」ヨブと友人の議論は果てしなく続くが、いまヨブは、人事の考察、人間の議論を打切って、立って神を仰ぎ望み、むしろ大自然に現れた神の不思議なみわざを思うべきだ。雨も降り嵐も吹く。天地が氷結したと思うと今度は、南風が吹いて、ヨブの衣服さえ暖まってくる。ヨブよ、議論より、むしろそれを思え。詩篇にも「静まってわたしが神であることを知れ」と記してあるではないか。

2月15日 今日通読箇所 ヨブ記 38章1～15

「語りかけたもう神」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOB381.mp3>

果てしもなく議論を続けるヨブとその友人たちに対して、いよいよ沈黙を破って神が語りかけてくださる時が来た。神はここで、壮大な大自然のスケールとその経営の神秘をお語りになり、人間の微小無知を悟らせて下さる。自然界も摂理も、全能の神のみわざであって、とても人間にその全部は分からないのだから、それについて考え、悩み、議論することは止めて、無条件に神を信じ、委ね、従うのが、そもそも信仰の本質ではないかと。

2月16日 今日通読箇所 ヨブ記 38章16～38

「美しき天然」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOB382.mp3>

「もろもろの天は神の栄光をあらわし、大空はみ手のわざを示す」と詩篇に歌われ、ゲーテも「自然は神の衣装だ」と言っている、自然界ほど壮大で美しいものはない。もともとヨブ記は、深刻な哲学的議論に満ちた聖書だが、ここからしばらくは神がみずから述べたもうた、自然描写、自然賛歌がつづき、聖書の中でも名文中の名文で、わたしなどはむかしから、朗唱して倦むことを知らない。最も魅力ある聖書の部分のひとつなのだ。

2月17日 今日に通読箇所 ヨブ記 38章39～39章12
「自然動物園」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOB383.mp3>

パンダやコアラを飼育し繁殖させるために、動物園がどんなに苦勞しているか、日本では子供でも知っている。いま神はヨブと友人たちの目を、神の經營する世界動物園に向けさせる。丘にも砂漠にも、川にも海にも、大空にも、一滴の水の中にさえ、神の造り養いたもう動物、生物が満ちている。これも人知をはるかに越え、人力の及ばない範囲だ。その微小な人間が試みに会うとすぐ、神のみ心が分らないの、その愛を疑うなどと言うのだ。

2月18日 今日に通読箇所 ヨブ記 39章13～30
「動物の写真」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOB3911.mp3>

動物はあるいは勇ましく、かわいく、または珍妙でそれぞれ魅力があり、昔から絵や彫刻や芸術写真のテーマになっている。ここには何となくとぼけてユーモラスなダチョウ。勇ましい軍馬。猛々しく、しかも孤独で神秘的な鷲の記述がある。これら聖書的名文の表現力に較べれば、絵画も彫刻もなかなか及ばない感じだ。しかもこれはただの芸術などではなく、創造者の偉大と人間の微小を、ヨブに実感させるための神の語りかけなのだ。

2月19日 今日に通読箇所 ヨブ記 40章1～24
「河馬(かば)の顔に水」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOB401.mp3>

今までの長いヨブと友人の論争は「全能者と争い、神と論ずる」趣があった。しかし、いまヨブは悔い改めて口を閉じ、ただ神に対する絶対の信仰と無条件の服従を告白するに至ったのであった。ここに河馬が出てくるが、彼は戦車の如く強いのに、平和と無為を愛して水中に潜り鼻づらだけ出している。そのかわりヨルダン河が顔に注ぐともびくともせず、頑然として無為にとどまる。羨ましい奴だ。

2月20日 今日に通読箇所 ヨブ記 41章1～34
「自由の典型ワニ」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOB411.mp3>

最後に出てきた動物はワニである。ワニは人間などをせせら笑い、力に物を言

わせ、敏捷に自由に暴れまわる。昔の人間にはとても手に負えない存在で、つかまえてワニ皮のハンドバッグを作る気力などは、とても当時の人にはなかったのだ。そのワニもまた、神が造り養い守りたもう被造物の一つなのだと思います。世界も歴史も人間の運命も、支配したもうのはただ神のみであるという真理は、いまはヨブの目に明らかだった。

2月21日 今日に通読箇所 ヨブ記 42章
「ヨブの沈黙」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/18YOB421.mp3>

ヨブが苦難に会い、また友人との議論の間、神は不思議に沈黙していた。しかしいまは、ヨブに信仰と服従の沈黙が来た。ここでヨブの信仰は完成し、神は訴えるサタンにお勝ちになったのである。この試練は約2年間で、神の恵みによってヨブは再び家族財産など、一切の所有を回復した。ヤコブの言葉のように「ヨブの結末」をみれば「主の慈愛とあわれみの富」がわかるのである。これで随分長く交読を続けてきたヨブ記も終わりました。

2月22日 今日に通読箇所 ヤコブの手紙 1章1～8
「信仰による忍耐」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/59YAKO11.mp3>

2節の「いろいろな試練に会った場合、それをむしろ非常に喜ばしいことと思いなさい」というお言葉は、一般の考え方に逆行しています。ローマ人への手紙5章3、4節にも「…患難をも喜んでい。なぜなら、患難は忍耐を生み出し、忍耐は錬達を生み出し、錬達は希望を生み出すことを、知っているからである」とあり、信仰による忍耐は錬達、希望に繋がるとあります。錬達とは円熟した性格、試験済みの信仰と、試練を経た真実を意味します。人生において、試練や患難を避けられないとしたら、秘訣は、信仰による忍耐を持って歩み続けること、と教えられます。ヨセフは遭遇も人格もキリストに最も似た人と言われます。試練を通して彼に円熟した人格が与えられたからでしょう。「十分に成長を遂げた人」それが4節の意味です。

2月23日 今日に通読箇所 ヤコブの手紙 1章5～11
「神からの知恵」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/59YAKO12.mp3>

ヤコブの手紙は、初代教会をつくり上げてゆく過程にある時代に書かれました。だんだんとキリスト教会が成立し、前進してゆこうとする時、当然のように迫害の手が伸びてきました。そして、様々な試練が当時の教会の人たちに及んだのです。その試練の中で、ある人たちには神様を疑う気持ちが起こってきたのです。そうした試練への対処の仕方について教会に送られた手紙なのです。そこでヤコブは、聖霊に導かれつつ「とがめもせず惜しみなくすべての人に与えられる神」（5節）に知恵を願い求めるようにと勧めたのです。なぜなら、こうした状況は皆が「神からの知恵」を与えられなければ、乗り越えることが難しいからです。

2月24日 今日の通読箇所 ヤコブの手紙 1章12～18

「誘惑に関する教え」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/59YAKO13.mp3>

神様が試練を送られるのは、私たちの中に忍耐を生じさせ、成長させるためですが、人を誘惑して、信仰と人格を訓練するということはありません。ヤコブは、ここで誘惑に関して3つのことを教えています。第一は「だれでも誘惑に会う」（13節前半）ということです。イエス様でさえ誘惑に会われました。自分は大丈夫などと思うのはとても危険で、常に信仰の武装をしていなければなりません。第二は「神は…誘惑…なさらない」（13節後半）ということです。だから誘惑に会った時、信仰によって神からの力をいただいて、サタンに勝利することが大事です。第三は「誘惑を甘く見るな」ということです。それは結果的に死を生むことになるからです。15節には「欲がはらんで罪を生み、罪が熟して死を生み出す」と書いてあります。だから私たちは誘惑に対して「思い違いをしてはいけない」（16節）のです。

2月25日 今日の通読箇所 ヤコブの手紙 1章19～27

「みことばを行う人に」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/59YAKO14.mp3>

人の怒りは、神様が望みまた要求しておられる義を実現しません。怒り腹を立てるのはおそくしなさい。心に植えられて根を張った御言は、あなたがたの魂を救う力を持っています。御言を聞くだけでそれに従わない人は鏡に映った自分の生まれつきの顔を見てそこを立ち去るのですが、たちまち、自分がどういうものであったか忘れてしまいます。不注意に聞くだけで、あとですぐに忘れてしまうのでなく、積極的にそれに従って行う人は、その行い、すなわち従順の生活によって祝福されるのです。御言を行う人になりなさい。「父なる神のみまえに清く汚れのない信心とは、困っている孤児や、やもめを見舞い、自らは世の汚れに染まらずに、身を清く保つことにほかならない」27節。

2月26日 今日の通読箇所 ヤコブの手紙 2章1～8

「自分を愛するように」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/59YAKO21.mp3>

イエス様は有名な「親切なサマリヤ人」のお話をしてくださいました。ユダヤ人とサマリヤ人の間には歴史的にも宗教的にも根深い対立と偏見がありました。「親切なサマリヤ人」はそういうユダヤ人の旅人を助け介抱しました。やがてイエス様は選民ユダヤ人だけでなく、全ての人のために十字架で死んでくださいました。イエス様は、分け隔てのない愛を示してくださいました。主が私たちを分け隔てなくお取り扱いくださっているのですから、私たちはなおさらそのように歩むべきで、ここにありますように、経済的に豊かだという理由で人を優遇し、貧しいという理由で人を冷遇することは全くみ心ではありません。どちらも、救われなければならない、主に愛されている人々なのです。8節の教えは、律法の最高の教えです。

2月27日 今日の通読箇所 ヤコブの手紙 2章9～13

「さばきに勝つあわれみ」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/59YAKO22.mp3>

ヤコブは、「もし分け隔てをするならば」（9節）とのべて、分け隔てに対する罪を指摘しています。なぜなら神様の律法についての原則は、律法のどの部分を犯しても、その人は律法の違反者となるからです。他の面でどんなによかったとしても、たった一つ、兄弟を分け隔てするならば、神様の律法を破ったことになり、罪を犯した人となるのです。人は誰でも、自分の蒔いたものを刈りとることになります。そして、終わりの日に、神様はあらゆる人々を律法によって厳重な刑罰に定めることになるのです。しかし人々が、自分は神様に罪を赦されたゆえに、他の人を赦し、主のあわれみを感謝し、他人に対してあわれみの心を示していくならば、神様はご自身の栄光の中に入れてくださるのです。こうして、あわれみはさばきに勝つのです。

2月28日 今日の通読箇所 ヤコブの手紙 2章14～26

「行いと信仰」

<https://tatebayashi-kk.org/devotion/tsudoku/59YAKO23.mp3>

この段落は、この手紙の中で最も重要な点としてあげられる箇所です。教会の歴史においても様々な波紋を呼び起こしてきたところです。人は信仰によってのみ救われることを強調したルターは、ヤコブの手紙が、信仰に対して行いを強調しているので、この手紙を「藁の書簡」と呼んで非難したのは有名です。この段落を一言で言い表すならば、行いの伴わない信仰は意味がない、ということです。もちろんパウロの言った信仰による救いを非難したわけではありません。ただ「信仰、信仰」と言っている事に対する反動として、この頃には行いを軽視する人たちがいたのです。イエス様を信じたといいながら、その生活や行いに信仰が生きていない人たちがいたのです。ヤコブはそういう状態を大変心配し、行いを強調して書いているのです。